



分娩室実習

日方圭子

英国・サリー大学助産課程学生(ダイレクトエントリーコース)

● 2002年1月

年が明けて、去年の秋以来久しぶりの、9週間の分娩室実習が始まった。ダイレクトエントリーコースの3年間でも、看護科卒業後の1年半コースでも、助産婦になるために、卒業までに40件以上の正常産を取らなければならない。

私の実習先病院は年間4,000件弱のお産があるから、コース終了前に40件のお産をとることは難しくないように思える。なのに年末の時点で、私はまだ7件取っただけ。クラスで一番遅れていた。「2年生のうちにできるだけ数を稼いでおいたら、3年目に焦らないでじっくり実習できるよ」との病院助産婦や先輩学生たちのアドバイスに、本実習では分娩室に焦点をあてて、できるだけ数をこなすことに決めた。

新入生の実習が始まったのと同時にメンターの異動があって、私のメンターは同い年のメルから助産歴20数年のメリーに変わった。メリーは通常の1日7時間半勤務ではなく、ダブルシフト(7時から21時)をする。それに毎月、1週間4回連続夜勤をするので、私も3夜連続の夜勤をやってみた。夜でも助産婦はほとんど変わらない人数の6~7人体制。1シフトの時間が延びた分、一つのお産に付き合う時間も長くなって、お産途中の産婦さんに「時間が来たから」と次のスタッフに引き継いでさよならをする回数が減ったし、今までより少し、お産を取れる確率が高くなった。

それでも、1月は分娩室実習の学生が異常に多くて、お産を独り占めできない状況だった。特に2月に卒業が迫っている学生の数人はかなり焦って、毎日残りの介助数を数えながら実習をしている。その1人、ジュディが1件もお産を取れずにいた日に(ジュディが1日ずっと付き添っていた女性は、緊急帝王切開になってしまった)、運良く私が3件お産を取った日には、さすがにヒンシュクを買った。

助産学生に加えて、医学生数人が2週間の実習に来ていて、多いときには助産婦7人に学生7人、という日もあった。医学生は、10件正常産に立ち会わないといけない。でも積極的に男性の医学生を受け入れたがる産婦さんが少ないせいか、分娩第二期間になるのをスタッフ控え室でひたすら待っている医学生の姿が目についた。

自然なお産を経験したい！と願うのだけれど、私の実習病院でその機会は本当に少ないと感じる。今年になって新設したバースプールは、助産婦の経験不足からかまだ積極的に活用されていない。陣痛の痛みをマッサージやお風呂、TENS(経皮的電気刺激)、笑気ガスだけで乗り切る人は、私が会った中では数えるほどで、ベシジン、硬膜外麻酔が頻繁に使われる。ある新聞の統計で、この病院は陣痛誘発、会陰切開、帝王切開等「医療介入率国内トップ」にあげられてしまった。この環境で本当の助産技術を学べるだろうか、と時に不安になる。